

## 1950年代における南茅部町の 水産加工業の調査報告

渡 辺 英 郎

### はじめに

この報告は北海道函館中部高等学校人文地理研究部が1957年(昭和32年)8月に臼尻村で、1958年8月に尾札部村で面接調査によって収集した資料であり、拙者は研究部の顧問として調査指導をした。

現在この調査結果は発表物として残されていない。調査からおよそ半世紀を経て当該地域も変化しており、この報告は歴史的資料として価値があると思われるので発表する。

### 地域の概況

臼尻村と尾札部村は合併して現在は南茅部町となっている。

昭和30年代、渡島半島一帯の沿岸漁村ではイカ漁業が盛んで漁村はスルメ製造で賑わっていた。スルメ製法はイカの内臓を除いて天日に干す方法なので、品質は天候に左右されるが、原料のイカと干し場さえあればつくれたからイカ干しの風景はいたるところでみられ、ここから生ずる臭いが地域一帯にに充満して函館地域特有の臭いとなっていた。

渡島管内のイカ漁獲高は昭和27年に21万トン記録した。その後28年は15.5万トン、29年に19万トン、30年に17万トン、昭和31年以後は10万トン割るほどに減少した。

臼尻村と尾札部村は、表1に示すような漁業生産に依存する純漁村で、イカ漁業とコンブ採取が主漁業である。

1950年代の漁村で漁家の最大の関心事となっていたのは、イカの低価格と労働力不足問題である。

函館市を除く沿岸漁村では漁港に水揚げされたイカは鮮魚イカ、冷凍イカとして流通する量は少なく、大部分が加工原料として流通したことが原因してイカの市場価格は低迷を続けていた。また、漁家は漁労や自家加工は家族労働中心であったが、水揚げの多い漁港では、イカ漁船の乗組員である釣りと呼ばれたイカ釣り漁夫と、イカ加工に従事する女子従業員の需要が増加して、村内はもとより近隣からの供給だけでは不足して、道内や青森県などの遠隔地から雇い入れて対応していた。

船主を兼ねる水産加工場の経営者は、加工場のそばに雇用者が寝起きする番屋を建てて生活の場を提供して労務者を雇い入れたので、漁港のある漁村は番屋で暮らす季節労務者で賑わった。

表 1 昭和32年の漁獲高(渡島支庁水産課製品指導係作成、渡島の漁獲高より)  
単位は貫(1貫=3.75kg)

村 名	にしん	いわし	さけ	ます	たら	すけそうたら	ほっけ
尾 札 部	61,620	62,500	1,465	9,186	2,519	721	9,898
白 尻	39,508	12,500	639	513	1,662	2,600	2,019
渡島合計	413,471	5,358,846	29,434	173,199	14,583	108,846	1,782,377

村 名	さば	ひらめ	まぐろ	さんま	いか	たこ	うに	こんぶ
尾 札 部	26,348	501	65,923	33,100	2,957,150	23,809	25,300	149,860
白 尻	2,870	2,229	16,850	23,591	1,462,995	25,368	21,823	79,981
渡島合計	846,734	47,581	158,657	2,820,679	24,082,346	423,072	257,986	1,150,825

## 調査の目的と方法

調査は水産加工業の実態を把握するのが目的である。

村役場で加工業者の名簿を入手して、調査員が個別に加工業経営者に面接して調査項目内容を聴取して調査カードに記入する面接聴取法を採用した。

## 調査結果

臼尻村の調査結果は表2のとおりである。

表2から図1、図2を作成した。図1は臼尻村の水産加工場の分布、図2は臼尻村の水産加工場の従業員規模別分布である。

尾札部村の調査結果は表3のとおりである。

表2 臼尻町における水産加工業の雇用状況 1957年(昭和32)8月調査

	経営者名	本間哲郎	小川幸四郎	西田幸三郎	村井快次郎	村井一郎
	地図上の住居位置	11	24	25	26	27
1	所得税	納める	納める	納める	納める	納める
2	畑耕作面積	1反	6.5反	3.3反		10反
3	所有漁船無動力船			2隻	3隻	1隻
	動力船	13ト、1隻		13ト、1隻	25ト、2隻	11ト、1隻
4	雇用主となった年数	2年	40年	2年	15年	28年
5	初めて雇用した年	昭和31年	大正2年	昭和2年		
6	季節的に雇うのか	季節的に雇う		季節的に雇う	常時雇う	季節的に雇う
	毎年雇うか	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う
7	32年雇用者数	12人	7人	2人	28人	
	31年雇用者数	12人	18人	2人	50人	19人
	30年雇用者数					
8	雇用者の出身地、村内	5人	20人			
	村外	7人	1人	2人		10人
	道外		6人		28人	5人
9	雇用者を採す方法		親戚	親戚	船頭	知人
10	雇用者の旅費の負担者	雇い主と本人	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主
11	雇用契約	雇い主と本人				
12	雇用期間	6ヶ月	5ヶ月	9ヶ月	4ヶ月	6ヶ月
13	雇用契約の条件	赤字のとき賃金棒引				
14	賃金					
15	雇用中の生活費の負担者					
16	賃金の支払い方法		前払い		歩合制	歩合制
17	船頭との契約内容	乗組員の2倍の賃金				
18	船頭を選ぶの条件	経験、知識、資格			経験	人柄と経験

村井益蔵	小川毅一郎	野村徳治	梅本松次郎	山田松蔵	川井金作	野村幸兵衛
28	29	18	19	20	21	22
納める	納める	納めない	納める	納める	納める	納める
3 反		2 反	3 反	3 反	4 反	
1 隻			2 隻			
15ト、1 隻						
8 年	12 年	3 年	10 年	13 年	20 年	10 年
	昭和 20 年	昭和 29 年	昭和 22 年	昭和 19 年	昭和 10 年	昭和 23 年
季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う
毎年雇う		毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う
5 人	6 人	2 人	7 人	4 人	15 人	7 人
		2 人				7 人
			7 人	4 人	5 人	3 人
1 人					10 人	
知人	親戚	知人	知人	職安	知人	知人
雇い主	雇い主と本人	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主
		雇い主と本人	雇い主と本人	雇い主と代表	雇い主と本人	雇い主と親
9 ヶ月	4 ヶ月	4 ヶ月	3 ヶ月	3 ヶ月	4 ヶ月	4 ヶ月
				失業保険を掛ける		
			雇い主	雇い主	雇い主	住み込み
歩合制			仕度金だす			
経験と経験年数			若者と気が合う			

野村幸治	小川幸福	吉田哲郎	吉崎健太郎	小川利喜太郎	小川剛	小川信太郎
23	12	13	14	15	16	17
納める	納める	納める	納める	納める	納める	
	2 反	3 反	3 反	3 反	5 反	6. 5 反
				4 隻		
	16ト、1 隻			17ト、1 隻		
10 年	7 年	8 年	30 年	10 年	9 年	40 年
昭和 22 年	昭和 25 年	昭和 8 年	昭和 30 年	昭和 10 年	昭和 9 年	大正 4 年
季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う
毎年雇う		毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う
5 人				8 人	7 人	7 人
13 人	3 人	3 人	20 人	8 人	9 人	18 人
15 人	5 人	4 人	20 人	8 人	9 人	18 人
10 人	8 人	3 人		17 人	1 人	
3 人			20 人		6 人	
		知人	知人	親戚		親戚
雇い主	雇い主	雇い主	雇い主		雇い主	雇い主
雇い主と本人						
5 ヶ月	6 ヶ月	4 ヶ月	4 ヶ月	4 ヶ月	5 ヶ月	5 ヶ月
住み込み			雇い主			
	毎月定時	毎月定時	毎月定時	歩合		毎月定時
	歩合			歩合		
	資格、品行			素質		

山田鹿蔵	西田与市	西田作蔵	二本柳吾郎	二本柳常雄	二本柳重勝	小川利悦
10	9	8	7	6	1	2
納める	納める	納める	納める	納める	納めない	納めない
3反	4反		2反		2.5反	
2隻	2隻	1隻		2隻	1ト、2隻	なし
	18ト、1隻		1隻			
8年	8年	4年		10年	9年	6年
昭和23年	昭和23年			昭和22年	昭和22年	昭和26年
季節的に雇う	季節的に雇う		季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う
毎年雇う	毎年雇う		毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う
	3人	7				1人
1人	4人		1人	2人	21人	2人
2人	6人		5人	1人	21人	2人
		8		1人	5人	
2人			1人			
				1人	道外16人	2人
知人、役場	自分で	知人を通じて	知人を通じて	知人を通じて	知人を通じて	知人を通じて
雇い主	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主
1年3ヶ月		4ヶ月	4ヶ月	5ヶ月	4ヶ月	3ヶ月
前金						異なる
	食・住雇い主	食・住雇い主	食・住雇い主	食・住雇い主		
	兼組員の2倍の賃金					
	熱心さ、経験				品性と技術	

西田留吉	西田重雄	西田兵作	不明	不明	不明	不明
3	4	5				
納める	納める	納める	納める			
1.5反	2.0反	2.5反	3.5反	3反		
共同所有	1隻	2隻				
		15ト、1隻	4ト、2隻			21ト、1隻
2年	7年	4年	40年			
昭和28年		昭和4年	昭和8年	昭和25年		
		季節的に雇う				
毎年雇わない	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う		毎年雇う	毎年雇う
	2人	1人	9人		5人	40人
	2人	3人	13人	3人	6人	11人
	2人	3人	25人	4人	5人	9人
			5人			
						20人
	1人青森	3人青森	1人	3人	5人	13人
	自分で探す		知人を通じて			
雇い主	雇い主	雇い主	雇い主		雇い主	
3ヶ月	4ヶ月	4ヶ月	1年間	11ヶ月	4ヶ月	
		前金	固定給6000円	女,5000円		
		組合で決める		男,7000円		
食・住雇い主	食・住雇い主	住居雇い主	食・住雇い主			
			賃金の最低条件・水揚げの2人分			

表3 1958年尾札部村の水産加工業の実情(1958年8月12～13日調査)

1	経営者名	竹原	内藤	西谷	秋本	大川	吉田
2	年令	44才	48才	29才	25才	79才	51才
3	家族数	11人	10人	7人	3人	9人	6人
4	畑耕作面積	5.0反	5.0反	5.0反	4.25反	4反	1反
5	所有無動力船	4隻		3隻	2隻		
	動力船	6ト、1隻	12ト、1隻	12ト、1隻		12ト、1隻	
6	資本	自己資本	自己資本	自己資本	自己資本	自己資本	自己資本
7	経営開始時期	明治年代	明治20年	明治年代	大正年代	明治年代	昭和5年
8	以前の仕事	漁業	商業	漁業	雜貨商	軍人・漁業	回漕業
9	経営開始理由	先代から受け継ぐ	仕込みで利益をあげる	いか漁業がよくなった	店の負債のため	乗物酔いがする	海運が廃れた
10	兼業業種	旅館	米屋			コンブ採取	コンブ採取
11	加工内容	スルメ、魚油・魚粕	スルメ	スルメ	スルメ	スルメ、魚粕、たらちの背割り	スルメ
12	原料購入の場所	村内、持ち船	村内、持ち船	村内、持ち船	村内	村内、持ち船	村内
13	工場の月収入	15万円			2.5万円		45万円
14	所得税額	50万円		45万円		1.2万円	50万円
15	製品の貯蔵場所	自分の倉庫	自分の倉庫	自分の倉庫	自分の倉庫	自分の倉庫	自分の倉庫
16	販路	函館	函館、漁協	函館、漁協	函館	函館	函館、漁協
17	主な消費地	本州	函館	函館	函館	函館	函館
18	雇用主となった年数	53年	68年	7年	23年	13年	
19	初めて雇用した年	明治35年	明治20年	昭和25年	昭和10年	昭和20年	昭和23年
20	毎年雇うか	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う	毎年雇う
21	33年常用雇用者数		10人	7人	5人	6人	
22	常用雇用者月賃金		6000円	6000円	9000円	6000円	
23	季節的に雇うのか	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う	季節的に雇う
	33年臨時雇用者数	10人	20人		10人		1人
24	1ヶ月賃金(男)	10000円	日給1500円		11000円		7800円
	1ヶ月賃金(女)	8000円					
25	32年雇用者数	10人	10人	14人		3人	18人
26	31年雇用者数	15人	13人	14人		4人	1人
27	30年雇用者数	15人	15人	12人	4人	4人	1人
	雇用者の出身地、村内	2人	10人				11人
28	村外	8人	1人	3人			7人
	道外			4人	4人		
29	雇用者を探す方法	出稼ぎ組合や知人		毎年同じ人を雇う	自分で探す	職安や知人に頼む	組合
30	雇用者の旅費の負担	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主	雇い主
31	雇用期間	6～5ヶ月	6ヶ月	5ヶ月	3ヶ月		6ヶ月
32	雇用契約の条件	健康			手当金	賃金、手当	
33	雇用中の生活	住み込み	住み込み	住み込み	住み込み	住み込み	住み込み
34	賃金の支払い方法	毎月		前払い	前払い	毎月	毎月
35	船頭との契約内容	2人前の給料	漁獲高の4割と自分で釣った分	1ヶ月の最低補償額が7000円		漁獲高の4割と自分で釣った分	
36	船頭選びの条件		力量と人格	経験		経験と力量	力量と統率力
37	今後も続けるのか	続ける	転業	続ける	続ける		続ける

数字は表 2 の経営者の住宅位置である

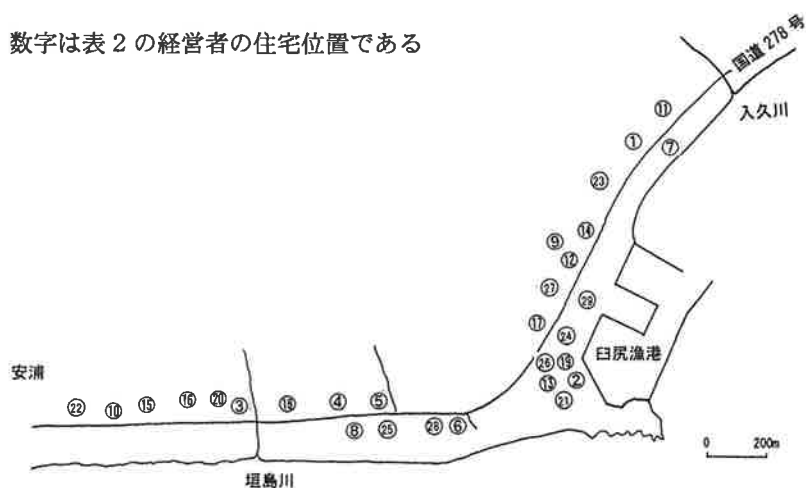


図 1 白尻村の水産加工場分布 (1957 年 8 月)

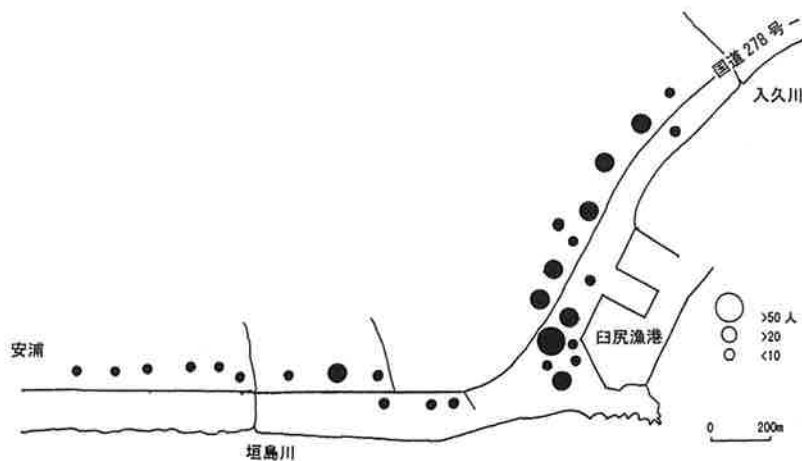


図 2 白尻村の水産加工場の雇用規模別分布 (1957 年 8 月)

### 臼尻村の考察

1. 1957年の水産加工業者は33経営体である。臼尻が尾札部に比べて水産加工工場が多いのは漁港が完備していてイカ漁船の入港が多いためである。
2. 耕作地は水田は皆無で、水産加工経営体の72%は畑地を所有している。規模別にみると2～4反を所有するのが最も多く83%を占める。
3. 漁船の所有状況は、全経営体の42%が無動力船を持っている。動力船は全経営体の36%が所有している。漁船規模は10～25トンが多く83%を占めている。
4. 雇用主になってからの年数は、9年以下が45%で最も多く、10～19年が24%、20年以上が18%である。
5. 全経営体の84%は雇用者を毎年雇っている。
6. 雇い方は常雇いは少なく、70%は加工をする時期だけ季節的に雇っている。
7. 昭和31年の雇用状況をみると、雇用数9人以下が64%、10～19人が25%で、全体の90%は19人以下である。このほか20人以上、50人以上を雇用したのがそれぞれ1戸づつある。
8. 雇用者の出身地をみると、村外が84%を占める。村内は16%にすぎない。雇用者の半数は本州出身で、三分の一が道内村外者である。
9. 雇用者は知人の伝手で探すのが最も多い。これに親戚を通じて探すが続くが、自分で探す、職安を経由するは極めて少ない。
10. 雇用期間は3～15ヶ月間と幅があるが、3～4ヶ月間雇用するのが最も多く58%をしめる。5～6ヶ月間雇用しているのは三分の一である。
11. 雇用者一ヶ月の賃金は月払いの固定給で、男子6000～7000円、女子5000円が相場である。前払いもある。釣り子の賃金は歩合制である。
12. 雇用者の旅費は雇い主が負担するのが一般的である。
13. 雇用期間中は雇い主が提供する番屋に住み込んで寝起きして食費は本人負担であるが、住み込みは雇い主負担である。



14. 船頭を雇用するときの条件は、経験・知識・資格・人格が考慮されている。
15. 船頭の賃金は、乗組員の 2 倍や、漁獲高の歩合制をとっている。

### 尾札部村の考察

1. 1958 年の水産加工業経営者は、竹原、内藤、西谷、秋本、大川、吉田の 6 氏である。
2. 経営者の年令は 20 才代が 2 名、4 名が 40 才以上である。
3. 家族数では多い世帯は 11 名、少ない世帯は 3 名である。
4. 耕作地は水田は皆無で、4～5 反の畑を所有しているのが 5 経営体。1 経営体が 1 反を所有している。
5. 所有漁船は 4 経営体が 12 トンの動力船を所有していて、生産した漁獲物を自家加工している。
6. 資本は自己資本で会社組織ではない。
7. 水産加工業をはじめた時期は 4 経営体が明治期である。1 経営体が大正期で古い歴史をもっている。
8. 水産加工業をはじめ前の職業は半数が漁業、半数が商業である。
9. 水産加工業をはじめた理由は、親から継承した。漁業仕込みで利益をあげて進出した。イカ漁業の好況から。店の負債のために。海運が廃れたなど様々である。
10. 兼業状況は、旅館を兼業するもの、米屋を兼業するものがそれぞれ 1 経営体、コンブ採取を兼業するもの 2 経営体である。
11. 加工内容は全てがスルメ製造をしており、2 経営体がいわし、ほっけを原料とする魚粕製造をしている。
12. 加工原料は村内で確保している。
13. 加工場の収入は 2. 5 万円～45 万円とかなり開きがみられる。
14. 所得税の納入額は半数が 45 万円～50 万円である。

15. 製品は自分の倉庫に保管している。
16. 販路は漁協と、函館の間屋である。
17. 製品の消費地は函館を経由して本州に送られる。
18. 加工労働力は雇用労働者に依存するが、雇用主になってから 53年、63年と永い歴史をもつ経営体がある。
19. 雇用主になった年代は明治期が 2 経営体、昭和の戦後が 3 経営体である。
20. 雇用者は毎年雇い、常用雇用者と臨時雇用者に区分される。
21. 常用雇用者数は少なく、臨時雇用者数は一経営体で 10 ～ 20 人を数える。
22. 賃金は常用雇用者が 6000～9000 円、臨時雇用者は 7800～11000 円である。
24. 女子の賃金は 8000 円で男子より 2000 円低い。
25. 昭和 30 ～ 32 年の雇用者数は 10 ～ 15 人が最も多い。
28. 雇用者の出身地は村内が最も多いが、村内から得られないと村外、道外に求めている。
29. 雇用者を捜す方法は出稼ぎ組合、職安、知人に依存する。
30. 雇用者の旅費は雇い主が負担している。
31. 雇用期間は 3 ～ 6 ヶ月で、6 ヶ月間雇用するのが多い。
32. 雇用条件は健康であること、手当をだすことなど。
33. 雇用者の生活は雇い主が提供する番屋と呼ばれる住居に住み込む。
34. 賃金の支払いは、前払い、月払いがある。
35. 船頭を雇うときの賃金は漁獲高の 4 割と船頭が自分で釣った分が船頭の取り分となっているのが 2 経営体ある。また、1 ヶ月の 7000 円の最低保障額を決めているところもある。
36. 船頭を選ぶときには、経験と力量、人格、統率力が重視されている。
37. 水産加工業を今後も続けるかどうかは、転業を考えているのは 1 経営体だけで 4 経営体は続けると答えている。

図1、図2を作成するため2001年8月発行のゼンリンの住宅地図によって加工経営者の住宅位置を小川幸四郎氏の協力をえて確認をした。記してお礼を申し上げる。

### 参考文献

大淵玄一．函館市のスルメイカ漁業の経済的地位とその生産基盤 1955年．

